

---

# 銀色のブラッド

神埜 郁葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀色のブラッド

### 【Nコード】

N6858L

### 【作者名】

神埜 郁葉

### 【あらすじ】

極々普通の両親と暮らし

極々普通の生活をし

極々普通の高校生活を送る

男子高校生、神宮時 彰”

この平凡な世界に嫌気が差している彼にはある秘密がある

銀色の鮮血 シルバーブラッド と言う名の銃使い

そんな彼の通う高校に3ヶ月前に転入してきた女子高生、秋月 真理”

元気で明るい女の子（クラスメイト曰く）  
そんな彼女に意味ありげな視線を送られる日々が続いたある日  
彼の運命を変える出来事が起こる・・・

## 第1話 始まりの刻

平凡な日常に

平凡な世界

故意に動き出された歯車は

一体どこへと

続いて行くのだろうか

この物語の始まりと共に終演へと向かって行く

さて

この物語の主役は、一体……

誰だろうか

この物語は、一体……

何処へと辿り着くのだろうか

それを知るのは……

第一話 【始まりの刻】

僕の名前は神宮時じんぐうじ 彰あきら

至って普通の両親から生まれ  
極々普通の生活をおくる  
一般家庭の健全な男子高校生である

成績：普通  
体力：人並み

クラスで浮いた存在でもなく  
至って普通の僕

そんな僕にも人には言えない秘密がある

、銀色の鮮血”【シルバーブラッド】

それが僕の夜の通り名、もう一つの名

時刻は夜の九時

とあるビルの最上階の一角に影はいた  
闇に溶け込むかの様な夜色のコートに銀色の銃  
少し長めの銀色の髪が風に靡く  
フードを深く被り、紅の瞳が夜の繁華街を見下ろす  
その先には、今夜のターゲット  
両手に握られた銀色の銃が月明かりに照らされる

さあ

「仕事の始まりです」

何故だろうか

何時からだろうか

この世界が酷く退屈で、酷く空虚で・・・

普通に学校へ通い

普通にクラスメイトと挨拶を交わし

普通に授業を受ける

何のために学校へ通い、授業を受ける

そんなの、将来のためか

もしくは、それが・・・当たり前のことだから・・・？

世界史の先生は、とても温厚な人である

この学校でとても信頼されている先生と言っても良い  
しかし、僕はこの先生が

嫌いだ

この平凡すぎる日常に、しっくりと当てはまる

その存在は僕にとって実に嫌悪感を与えるものである  
そんな先生の話聞き流し  
空一面に広がる雲一つ無い青い空を  
窓を隔てて僕は眺める  
僕の席は窓際が一番端の一番後ろの席  
クラスメイト曰く、皆羨む特等席  
机に頬杖を着いて考える

さて、

今日の仕事はどうしようか

ふ、と目線を教室へと戻す

目線の先には、教室中央の席に座る女子

秋月 あきつき 真理 まりさん

三ヶ月前に転入して来た人だ  
何処か、他のクラスメイトとは違う雰囲気を持っている  
性格は至って普通で、クラスメイト曰く



元気で明るい女の子、らしい・・・

しかも頭脳明晰

顔立ちは美人とは言い切れないが

どちらかというところ可愛い部類に入る感じの上

彼女については特にこれと言った感情はない

が、一つ気になることがあるとすれば

チラッ

秋月さんと目が合う

「!?!」

サッ

直ぐに逸らされた

簡単に言うつと見られている

特に接点もないはずなのに、むしろまだ一回も口を聞いてない・・・

転入初日から気付かれない程度に見られている

今のは偶々目が合ってしまったって反らされたが

とりあえず、彼女に対して僕は警戒しておかなければならない

そうして今日も一日が終わるはずだった

「神宮寺くん、ちょっといいかな？」

放課後、下駄箱前

唐突に、それとも計算されたものなのか・・・

秋月 真理さんが、僕に話しかけてきた

僕は持っていた上履きを下駄箱に仕舞い、彼女の方へと向き直った

「僕に何か用ですか？」

至って普通に受け答える僕に、彼女は意味ありげな笑みを送る  
夕日に照らされながら僕は少し不思議そうに彼女を見た

「いきなり本題入っちゃうけど良い？」

少し首を傾げて彼女は僕にそう聞いてきた

きっと普通の男子クラスメイトからしたら可愛い仕草なんだろう、  
と思う

ただ、僕にはそう言った感情は全く興味がなく  
と言うより元々感情が稀薄なためなのか・・・  
少々、話がずれてしまった

「構いませんよ」

そう言う僕に彼女は数歩近づいた

下から見上げるようにして

顔を近づけて一言

「君が、銀色の鮮血」【シルバーブラッド】でしょ？」

ピク

反応は一瞬

しかし、彼女にはそれが分かったのか「やっぱり」と言って笑みを  
浮かべた

「転入時は、まだ確信なかったんだけどね」

「そうですね・・・と言うことは貴女も、そっち ” 方面の方  
で？」

「うーん、どうだろう？確かにそっち側には詳しいけど、私達の所  
は・・・」

「私達？」

私達と言うことは複数、つまり・・・

グループか何かの組織に入っているのだろうか  
そう疑問を持つ僕に彼女は困った様に苦笑した

「ごめんごめん、私ね・・・実はとある組織に所属してて、まあ詳しい話は後で」

僕の横を通り抜けて外へと出る

それに続くように外へ出て彼女の横を歩いていくと

校門前に黒い、多分・・・外車、だろぅ車が止まっていた

その黒い外車の前で秋月さんは立ち止まった

僕の前に向き直り明るい調子で言った

「神宮寺 彰君！我等が総帥、紫翠様しすいがお待ちかねだよっ」

カチッ

止まっていた歯車が今・・・

ゆっくりと動き始めた

第1話 始まりの刻（後書き）

お読み下さり誠に有り難う御座います

## 第2話 組織「ヘルメス」

彼女に促されるまま車に乗った僕は運転席に座る運転手兼紫翠さん  
と言う人の秘書でもある鳴瀬なるせ 裕美氷ゆみひさんを紹介された  
黒髪をオールバックにして今時珍しい丸眼鏡に燕尾服  
二三度言葉を交わしてみても分かったことは、物腰柔らかでとても紳  
士的な人だと言うこと

「あのね、私が所属している・・・チームって言えば良いのかな？」  
うーん、と唸る秋月さんに対して運転をしている鳴瀬さんが軽く苦  
笑する

「そうですね・・・我々の場合、組織と言った方が正しいでしょう」  
「なるほど、組織・・・ですか」

「ただ、組織と言っても形式ばった堅苦しいモノではありませんよ」  
そう言って笑う鳴瀬さんの言葉に頷く秋月さん

「そうそう、翔君達何かしょっちゅう喧嘩してるし、この前なんか  
防弾窓ガラス18枚に自販機4台とパソコン3台、ドア2枚壊した  
んだよ!!」

「・・・一体どんな人達何だろうか

## 第二話 組織【ヘルメス】

「ごめんごめん、話ずれちゃったね」

考え込む僕に秋月さんは申し訳なさそうに謝った

「でね私達の所属している組織、【ヘルメス】って言うんだけどちよつと訳有りだね・・・昔、この国の政府が極秘で幾つかの研究所施設を使って実験をしてたんだって」

実験・・・？

脳裏に一瞬、何かフラッシュバックする感覚に陥る

「その後、幾つかの施設は全部潰れたらしいんだけど」

そこまで来て秋月さんは口元に手を当て内緒話でもするかのように声を潜めた

「その実験にあった“被験体”の多くが、まだ全部見つかってないの」

「死体や死骸も含めてね」と秋月さんは言う

実験に被験体・・・死体や死骸・・・人と生き物・・・

また頭の中で何かがフラッシュバックする

頭の中が真っ白になりそうな感覚で

そんな僕に気づかない秋月さんは構わず話しを続ける

「それで当時の研究だけに関わっていた人達はもう亡くなってるんだけどね」

「研究だけ・・・？」

そう疑問を持つ僕に鳴瀬さんはバックミラー越しにクスリと笑った

「察しの良い方で助かります」

「実は研究員兼被験体だった人の生存が確認されているの」

「研究員兼被験体って・・・その研究に加わっていて研究内容も知っていて、尚かつ自ら被験体になったって事？」

「うん」

疑心暗鬼しつつも僕は秋月さんに話の続きを促す

秋月さんは少し顔を俯かせ、けれど努めて明るい声で話した

「その人こそが組織、【ヘルメス】の創始者であり、我等が総帥で



もある紫翠様よ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何となく頭の片隅で予想していた答えが返って来た

まあ、

だからこそ、この組織、【ヘルメス】はあるのかと納得する

「それで、その組織である【ヘルメス】が僕に何のようなんですか？」

「おや、察しの良い君なら既に気付いているのではないですか？」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

バックミラー越しに問いかける鳴瀬さん

そうだ、何の様か何て分かっている

大方、予想は出来ている

少しの間を置いて小さく溜息を付いた

「僕に・・・・【ヘルメス】へ入れと？」

「ええ、その通りですよ」

僕と鳴瀬さんの遣り取りを黙って見つめる秋月さん

秋月さんはどうやら傍観に徹しているようだ

「全ての被験体の捕獲、撃破、又は死亡確認・・・・それが組織、【ヘルメス】の仕事であり使命です」

その言葉に、意味に、何かの重みを感じる

「詳しくは後ほど、紫翠様の方からお話があります」

鳴瀬さんの話しを最後に車内は静寂に包まれた

鳴瀬さんの後ろをついて歩く僕と秋月さん

僕が今いる建物は彼女達の組織、「ヘルメス」のアジトの様なものらしい

敷地が広く建物も大きい、そして建物内には様々な設備が整っている  
そんな一目見たら記憶にも話題にも残っているはずだが

どうやらこの敷地一帯には一般人が入って来らないよう結界が張つてあるらしい

一番奥に控える建物の中へ入ると中央に受付、左右にテラスが見える

鳴瀬さんは受付の女性に一言、何かを告げると中央の奥にあるエレベーターへと向かった

僕と秋月さんもそれに続いてエレベーターの前へ移動する

「紫翠様は4階の執務室にてお待ちしております」

「よお、裕美氷！と久し振りじゃねえか秋月」

「宗平！」

秋月さんの呼びかけに後ろを振り向くと宗平と呼ばれた男が笑みを浮かべて此方へ向かって来ていた

鳴瀬さんは呆れた様子でその男を見る、若干眉間に皺が寄っていた

「宗平・・・あなたという人は、いい加減そのだらしない態度を改めようとは思わないのですか」

「ハハッ相変わらずだなあ裕美氷は、態度なんて今更だろーが」

「はあ・・・それで？」

「ん？」

「何故あなたが、此所にいるのですか」

少し苛立ち気味の鳴瀬さんに対し全く、と言うか気づいてない様子の男は頭の後ろで腕を組み壁に寄りかかった

「あー・・・ちよつとな、紫翠様に呼ばれてんでね・・・ところで」

男は近づいて来て僕を見て一瞬、不思議そうな表情を浮かべた

「？」

「例の子ですよ」

「あー！コイツかあ」

「そうか、そうか」と言つて物珍しそうに男は下から上へと眺める  
少し苦手な種類の人間だ

男は丁度来たエレベーターへと僕達と一緒に乗り込む

そして、何処か確信めいた様子で吹いた

「たぶん、コイツの事で呼ばれたんだな」

「そうかもしれないね」

「……………」

「……………」

「もしかしてお前、この前の事まだ根に持ってたのか？」

「どうでしょうね」

鳴瀬さんはコホンと咳払いをすると僕の方を一瞥した

「神宮寺君、彼は天笠あまがさ 宗平しゅうへいと言います」

「よろしくな！えっと」

「神宮寺 彰です」

「……………」

僕の名前を聞いた途端、天笠さんが驚くのが目に見えて分かった  
しかし、それも一瞬のことですぐに笑顔へと戻る

「そうか彰か、これからよろしくな！」

「はい、こちらこそ」

ドンツと背中を強く叩かれ、少しむせた

それと同時にエレベーターも四階で止まる

天笠さんが準備体操でもするかのように軽く肩を回す

「そんじゃ、行きますか」

長い通路の向こう

奥に見える扉を目指して

**第2話 組織「ヘルメス」(後書き)**

お読み下さり有り難う御座います

一章に入るまでもう少しかかります

### 第3話 孤高の陰陽師

目前に広がる淡いピンクの生地

日差しに照らされた薄桃色のレース

小さく華奢な身体にぴったりと合ったウエディングドレスが舞う

此方を振り向く髪と瞳は綺麗な翡翠の色

今、僕達の目の前にはウエディングドレスを着た小さな花嫁がいた

「」「」「……」

「裕美氷！見て見て僕可愛い？」

小さなブーケを持ちながらニッコリと微笑む花嫁に裕美氷は呆れたように溜息をついた

「あなたという人h「かつわいい紫翠様！！」……………」  
……………」  
「……………」  
「え？」

爆笑している宗平の隣でキラキラと目を光らせて言った秋月さんの言葉に耳を疑った  
そんな二人に咳払いをして黙るよう促すと何ともいえない表情で氷裕美さんが答えた

「神宮寺君、もうお察しの様ですがこの方が組織、【ヘルメス】の創始者であり総帥である炎紫翠様です」

「よろしくね、神宮寺君！！僕のことには気軽に紫ちゃんって呼んでね」

「え、でも……………」

そう言つてチラリと裕美氷さんを見れば、苦笑して「紫翠様は、あ言つ方なので好きに呼んで構いませんよ」と一言

「……………紫翠さん」

紫翠さんは「紫ちゃんしいで良いのに」と頬を膨らませた

何故ウエディングドレスなのか、聞き倦ねていると僕の心情を察してか「さすがに私もこの姿は予想外でした」と溜息を着く裕美氷さんそんな裕美氷さんの吹きに紫翠さんが手に持ったブーケを胸の前で持ち直すと頬を染めて答える

「えへへ・・・実はこのウエディングドレス姿を見せたい人がいるんだ」

そう言っただけで照れる紫翠さんに裕美氷さんもその見せたい人に心当たりがあるのか「あの方ですか・・・」と額を抑えた  
それと同時に今まで爆笑していた宗平さんの方からゴツと言っ鈍い音が聞こえて振り返って見るとお腹を押さえて呻っていた

痛そうだ・・・  
そっとしておこう

それにしても、と僕はジッと炎 紫翠を見る

「（どう見ても普通の女の子）・・・」

そんな僕の思考を余所に紫翠さんは高級そうな椅子にウエディングドレスが皺にならないよう腰掛けると先ほどの表情とは一変して真剣な表情になった  
仕事の時の表情と言っのだろうか、公私混同はしないと云うことなのだろう

それにつられるようにさっきまでお腹を押さえていた宗平さんも真面目な表情になる

「さて神宮寺君、この度は我々の組織、【ヘルメス】への入隊の申し出を引き受けてくれて有り難う」



「いえ」

「もう察しているとは思いますが君の配属は主にSS級戦闘専門の第一部隊だ」

「・・・はい」

「第一部隊では主に単独で仕事をしてもらっているが必要となれば他の隊の援護や第一部隊だけの仕事、単独で複数の仕事を受けてもらう事もある」

「と言うか、第一部隊にどうしても一緒に組ませるとチームワークが壊滅的になってしまつてしまう3人がいてね・・・必然的に」と笑つて話す紫翠さんに対して、苦労しているのだから宗平さんは遠い目をしている

「第一部隊のメンバーは君を含めて5人いる、天笠宗平はその第一部隊隊長だ」

「分からない事があつたら彼に聞くと良い」と言つて紫翠さんは宗平さんを見る

宗平さんは「そう言う事だから宜しくな」と言つて手を差し出した差し出された手に少し躊躇してその手を取つた

「で、他のメンバーなんだけど・・・」と言つた所で急に廊下の方から騒がしい音が聞こえた

と同時に地響きが鳴る

何事かと宗平さんを見れば遠い目をしていて

秋月さんの方を見れば嬉しそうに笑つていて

裕美氷さんの方を見れば思いため息を着いていて

紫翠さんの方を見れば何故か頬を染めていた

何が何だか分からない内にその音の現況はドア・・・ではなく、壁をブチ破つて現れた



ていた

そして場違いなほどに微笑む裕美氷さんの額に、青筋が浮かんでい  
るのを僕は見逃さなかった

尋常ではないオーラに三人共押し黙った

「全く、貴方は毎度毎度・・・ドアから入って来なさいとあれほ  
ど言っただでしょう!!」

「お、おう」と茶髪の不良っぽい男性が謝り

「・・・すみませんでした」と納得いかない感じで黒髪の男性が謝り

「す、すまない」心底申し訳ないと言った感じのキレイな白金の髪  
の女性が謝った

その様子に秋月さんが笑う

「相変わらずだねえ翔ちゃん達は」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・何と云うか裕美氷さんって

「お母s「何も言つな、彰」・・・はい」

この発言はタブーらしい・・・

ので、僕の心の内に仕舞っておいた

10分ばかりの裕美氷さんの説教が終わり今まで静だった紫翠さんが頬を染め嬉しそうに3人の元へと駆け寄った  
嗚呼、きつとあの2人の男性のどちらかが、さっき言っていた『ウエディングドレスを見せたい人』なのだろうと気づく  
駆け寄ってくる花嫁（紫翠）に驚く3人・・・心なしか青ざめて見える

そして僕の予想に反して紫翠さんは2人の男性のどちらかではなく

「零————っ!!」

ガバチヨッ

女性の方へと抱きついた

「??？」

訳が分からない僕を余所にまた始まったとも言つように裕美氷さんが今日何度目かの溜息を着いた

「な、な、な、な・・・っ!!!？」

「えへへ、可愛いでしょ？零れいに見せたくって」

「だからって、何で女装なんだっ!!」

.....。

「女装……」

「女に見えるが紫翠は『男』だぞ」

……男？

宗平さんの言葉に目の前で押し問答する2人に視線を戻す  
何処をどう見ても女の子にしか見えない紫翠さん  
啞然とする僕に冷静に解説を入れる宗平さん

「まあ最初はオレも驚いたけどな（色々と）あれでも【孤高の陰陽師】って言われてる凄い人なんだ」

「それは、不思議ですね……（色々と）  
「だな……」

收拾のつかなくって来ている2人の間に仲裁に入る裕美氷さん  
色んな意味で彼女に同情の視線を送る男性2人  
未知なる世界だ

ようやく收拾が着いたのか椅子に座り直した紫翠さんが話しを戻す

「彼等が残りの第一部隊のメンバーで其処の不良っぽいのが神崎  
翔君」

「不良っぽいって何だ！」

「無視）んで、その隣の意地の悪そうなのが大宮 珪君」

「僕、意地悪く無いんだけど」

「無視）そして彼女は紅媛寺 零僕のマイダーリン」

「色々と）違う」

即答だ

「神宮寺 彰です、宜しくお願いします」

そう言ってお辞儀をすると  
マジマジと僕を見つめる翔さんはフツと笑って「嗚呼、よろしくな」と言った

「へえ」と含み笑いをする珪さんも「まあ、一緒になる事はそんなに無いけどよろしくね」と言ってお笑った

ジツと無言で見つめる零さんは一瞬悲しそうな目をした後「よろしく」と言ってお紫翠さんに仕事の報告をして部屋を出て行った

零さんに続いて翔さんと珪さんも報告をして出て行った

宗平さんも「悪いっちょっと用事思い出した!」と言ってお部屋から出て行った

さっきの慌ただしさが嘘の様に静かになると秋月さんが苦笑する

「翔君達って凄いでしょ?」

「そう、ですね」

「クスッ、それにしてもホント神宮寺君って礼儀正しいね」

そう言ってお秋月さんが笑った

「そうですね、彼等にも見習ってもらいたいです」と言ってお爽やかな笑顔で答える裕美氷さん

そんな裕美氷さんのオーラをモノともしない秋月さんは唐突に

「あ、ちなみに私は諜報専門の第五部隊隊長だから」

「え」

その日、僕は人生で今までに無いくらい（色々と）驚いた

休憩所の自販機前でソファに腰掛け窓の外をぼんやり眺める零に宗平は声をかけた

「よっ、大丈夫か？」

その声に零は視線だけ宗平の方へ向けた

「大丈夫じゃないのはお前の方じゃないのか」

「・・・どうだろうな」そう言って肩を竦める宗平にフッと零が鼻で笑った

「まあ、これも予想の範囲内だからな」

「出来れば無いことを願いたかったがな」

「・・・いつか」

「？」

「いつかアイツに本当の事を話すのか」

無表情ながらも何処か悲しそうな零の横顔に宗平は苦笑する  
そうして徐に零の頭を掻き回した

「っ！？やめろ、髪が乱れる」

「大丈夫だ」

「・・・」

「案外、俺達よりもしっかりしてるさアイツは」

「フツ・・・お前よりもな」

「おうおう、手厳しい事で」

ここまで来てしまったら

後は進むしかないのだろうな



第3話 孤高の陰陽師（後書き）

お読み頂き誠に有り難う御座います（礼

現時点（序章）での登場人物について

名前  
：神宮寺 彰  
通り名  
：銀色の鮮血 シルバーブラッド  
所属 エース  
：第一部隊  
被験体 スペル  
：スペルG

髪色  
：銀  
瞳  
：紅  
性別  
：男  
年齢  
：17歳  
身長  
：168？  
体重  
：54？

名前  
：あまがさ しゅつへい天笠 宗平  
所属  
：第一部隊隊長（SS級戦闘専門）  
髪色  
：ブラウン  
瞳  
：碧  
性別  
：男  
年齢  
：26歳  
身長  
：180？  
体重  
：71？

名前  
：こうえんじ紅媛寺 零 れい  
通り名  
：クラッシュヤー破壊神  
前世名  
：嫉妬のレヴィア  
所属  
：第一部隊  
被験体 スペル  
：スペルQ

髪色 : 白金  
瞳 : スカイブルー  
性別 : 女  
性別 : 23歳  
身長 : 167?  
体重 : 52?

名前 : 神崎 翔かんざき しよつ  
通り名 : 道化の情報屋クラウンハッカー  
前世名 : 憤怒のサータ  
所属 : 第一部隊  
被験体 : スペルK  
髪色 : 茶  
瞳 : 黄土  
性別 : 男  
年齢 : 21歳  
身長 : 174?  
体重 : 68?

名前 : 大宮 珪おおみや けい  
通り名 : 洗脳学的暗殺者マインドキラー  
所属 : 第一部隊 大宮家当主  
被験体 : スペルJ  
髪色 : 黒  
瞳 : 紫  
性別 : 男  
年齢 : 22歳  
身長 : 173?

体重  
：65？

名前  
：炎ほむら 紫翠しすい

通り名  
：孤高の魔術師

所属  
：スペルの元研究員兼被験体 総帥

被験体スベル  
：スペルS

髪色  
：翡翠

瞳  
：翡翠

性別  
：男

年齢  
：？？？

身長（幼少時の姿）  
：132？

体重  
：20？

身長（成人の姿）  
：172？

体重  
：64？

名前  
：鳴瀬なるせ 裕美氷ゆみひ

前世名  
：鵜う

所属  
：紫翠の秘書 運転手

髪色  
：黒

瞳  
：黒

性別  
：男

年齢  
：28歳

身長  
：178？

体重  
：69？

名前  
：秋月あきつき 真理まじ

所属  
：第五部隊隊長（諜報専門）

髪色  
：焦茶

瞳 性 年 身 体  
別 齡 長 重

： 女  
： 19 歲  
： 154 ?  
： 48 ?

現時点（序章）での登場人物について（後書き）

これからどんどん増えると思いますがどうぞ宜しくお願い致します

## 第4話 ヘルメス合同總會

両親が死んだ

その知らせは僕がヘルメスに入った翌日の朝、突然に舞い込んできた正確には親代わりだった人

紫翠さんから僕の両親が本当の両親ではないことを知ったのはその知らせを受けた直後だった

僕の親代わりになっていた人は元・ヘルメスの人間だった

それは昨夜、ヘルメスへ泊まることヘルメスへ入る事を告げた時に知らされた事だった

彼らはヘルメスを辞めた後、孤児院で養子をとった

それが僕だったらしい

それはヘルメス内でも知らなかったたらしく最近になって分かった事だった

どういう運命のイタズラか

僕が此処へ泊まると電話した数分後の事だったらしい

犯人は複数らしくヘルメスと因縁のある組織らしい

その組織は一部の政府内で創設されたもので僕達ヘルメスと同じく被験体の搜索なのだが

彼等の仕事は被験体の搜索及び抹殺・・・

簡単な話、被験体が周りに害を及ぼすと危険視されているため保護せず抹殺せよと言う事だった

そのため保護を目的とした搜索をするこちら側は<sup>ヘルメス</sup>彼等にとっては忌むべきものらしい

保護を目的とした組織と抹殺を目的とした組織

10年以上も対立してきていたのだが

元・ヘルメスの人間だったとはいえ被験体以外の者が殺害されると

いうのはこの10年間、前代未聞だったらしく  
ヘルメス内での動揺は隠しきれない

両親の身元はヘルメスの方で預かり、その日の午後に火葬する事と  
なった

#### 第四話【ヘルメス合同総会】

夜

「この後、ヘルメスの合同総会があるからちゃんと来いよ！」そう  
言って宗平さんは何処かへ行ってしまったけど

・・・せめて何処でやるのか言っして下さい

ポツンと一人取り残された俺はとりあえず「これは総会用の制服な  
！」と総会用に用意された制服に袖を通して与えられた自分の部屋  
へと戻る

僕の部屋は西側の5階の端、504号室ちなみに向かいの503号  
室は零さんで



僕の右隣の502号室は宗平さんその向かいの501号室は珪さん  
そして奥の中央にある500号室は翔さんだ

部屋の広さは何処も同じでバスルームとトイレも着いていて扉は指  
紋認証と暗証番号で開くようになっていた

僕がしばらく廊下に突っ立っているのと向かいの部屋から零さんが制  
服で出てきた

・・・何というか僕と違って零さんが制服を着ると落ち着いて見え  
て凄い様になっている気がする

初めので会った時のアレがなければ・・・（何気に失礼

僕の思考を余所に零さんは廊下にいる僕が予想外だったのか少し目  
を見開いてマジマジと見た後「どうかしたのか？」と声をかけてく  
れた

「合同総会のある場所が分からなくて・・・」

「アイツ（宗平）か・・・すまないな、アイツのそつ言つ所は日常  
茶飯事なんだ」

「あ、いえ別に・・・」

零さんは僕を一別した後、言葉を考えるかのように口籠もる

「・・・その、なんだ」

「？」

「もしアレだったら一緒に行つてやってもいいが・・・」

・・・アレって何だ

「嫌なら別に……」と言う零さんの言葉を制して「ありがとう」「  
ざいます」と僕は答える

そうすると零さんは何処かホツとしたように息を吐いた  
そうして零さんの後ろを着いて歩いていくと前方から零さんに声を  
かける人がいた

「零、今回の診察に来なかったそうだな」

「自分の体調ぐらい自分で管理出来る」

そう言う零さんに目の前の制服を着た男が呆れた様子で、啞えてい  
た煙草を片手に持ち替えて煙と共に溜息を吐いた

対して零さんは無表情だが額にはもの凄い量の冷や汗が出ていた

「……この前の事は済まなかったな、アイツ等にはよく言ってお  
いたから合同総会が終わったらウチ（医療室）に來い」

「アイツ等はどうにかならないのか」

「そう言うな、アイツ等だってやるときはやるヤツ等だ」

「……」

「……ただお前みたいなのは、どうも構いたくなるんだと」

「……拒否権は無いのか」

零さんがそこまで言った所で男の視線が僕の方へと向く

「何ならその新人君と一緒に來たらいい」

「ちょうどソイツのデータも取ろうと思ったとこだから」とそう  
言って携帯用の灰皿へ煙草を押しつけて消す  
零さんは少しの間、思索した後「分かった」と言っ歩き始めた  
それに続いて僕と男も一緒に歩き始める

「俺は第四部隊隊長の三神みかみ 千郷ちさとだ、第四部隊は医療を専門とした部隊だから怪我したときはウチに來い」

「まあ、多少五月蠅いヤツ等が数名いるが気にするな」と言っ  
て千郷さんは苦笑する

「第一部隊員の神宮寺 彰です」

「・・・思っていたよりも礼儀正しいな、第一部隊にしては珍しい」

・・・第一部隊では僕みたいなのは珍しいのか

零さん達と合同総会場所に着いた僕は自分の隊の列へと移動する  
既に珪さんと翔さんは来ていて（宗平さん以外）他の隊も全員揃っ  
ているようだった

そんな中後ろの方に僕が着ている制服と違う制服を着た団体を見つ  
けて疑問に思う

それに気づいた翔さんが僕に話しかける

「アイツらは各隊の増援部隊だ」

「増援部隊・・・増援部隊でなくても各隊に決まっているのなら何  
で同じ隊の同じ制服を着ないんですか？」

「ああ？そりゃ各隊に決まってるつっても必要とあらば他の隊の増  
援も行くからだよ、そのための増援だろ」

「何かそれってウチ（第一部隊）と少し似てますね」

僕がそう言つと翔さんは感に触つたらしく舌打ちをして苛立ったよ

うな口調になる

「アイツらは、選ばれなかったヤツら　だ・・・」

「選ばれなかった？」

「適正は認めるがそこまでだつつつとこと、だから増援部隊止まりなんだ」

「そう、何ですか」

チラリと後ろに控える増援隊を盗み見る

どう見ても僕より強そうで優秀そうな人達ばかりいるのに

むしろ僕はアツチ側なのではないのだろうか・・・

そんな思考がグルグルと僕の頭の中で巡っていると突然、聞き覚えのある声が響く

あれは・・・

「・・・宗平さん」

「忙しい最中、緊急で開かれた合同総会に集まってくれた事を感謝する」

「・・・（真面目だ）（失礼

「先ずは亡くなられた元・ヘルメスの構成員である神宮寺夫妻へ黙祷！」

宗平さん掛け声で皆が黙祷を捧げる

今頃になって両親が亡くなったと言う事実が僕の心へと重くのしかかった気がした

黙祷後、宗平さんは壇上の上から各隊を順々に見たあと空いている隊へと目を向けた

「第六と第八部隊は任務中のため今日の合同総会は第一から第五、

第七部隊と増援部隊で行う」

そこまで言うと同前にあるモニターに映像が映し出される  
モニターには金色と赤の不思議なデザインのマークが映し出されて  
いた

「これは!？」と誰かが呟く  
それと同時に周りもざわめき始めた

何が何だか分からない

宗平さんは静かに制すと言葉を続ける

「皆も察しの通り、このマークは我が組織と対立関係にある特殊特  
効暗殺部隊、ハデスのマークだ」

ハデス・・・?

ヘルメスと対立関係にあるということは、まさか・・・

「知つての通り神宮寺夫妻を殺害したのは現場の鑑識からこのハデ  
スによるものだと判明した、しかもご丁寧はこのマークのステカ  
ーを現場に貼り残してな」

そう言う宗平さんの言葉には、抑えられない怒りが込められている  
のが分かる

「そして昨夜同時刻にヘルメスへハデスから手紙が届いた、ハデス  
がいるであろう場所と挑戦状と思しきメッセージを添えて」

再び周囲がざわめき始める

「我が総帥である紫翠様含め長老方との緊急会議の結果、早期解決が望ましいと見て第一部隊と第二部隊でその挑戦を受けることとなった」

第一と第二……つまり敵もそれなりの強者と言うことだろう

「その他部隊は別の与えられた仕事の方に専念しろ……以上を持って合同総会を閉会する第一部隊及び第二部隊はその場に残るよう  
にその他各自解散！」

## 第5話 第一部隊と第二部隊

ヘルメス合同総会で決まった特殊特効暗殺部隊、ハデスとの決戦僕にとってはこれが初任務になるのだが・・・しかも、第二部隊と一緒になんて

「翔様！お久し振りですわv」

「ゲツ、蝶子！？」

「やあ零ちゃん相変わらず綺麗だね、少し見ない間にまた一段と綺麗になったんじゃない？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（無視）」

「えっと、あのっ・・・お久し振りです」

「君って相変わらずウジウジしてる、見ててイラッとするね（笑）」

「す、すみません（涙）」

・・・初っぱなから問題がありそうな気がする（色々と

「・・・・・・・・・・・・・・・・（仲が悪いのだろうか）」

收拾の着きそうにない彼等に困り果てていると僕と年の近そうな男の子が彼等に声をかけた

「蝶子、鹿目、猪間、いい加減にしろ・・・仕事だ分かっているだろっ」

その言葉に

「はいはい仕事の時は公私混同はなし、ね・・・分かりましたよ志

桎隊長「

「す、すみません隊長」

「申し訳ありませんわ」

と返す第二部隊方々

・・・隊長だったのか（失礼

## 第五話【第一部隊と第二部隊】

そこへ宗平さん・天笠隊長がやって来る



「お？相変わらず仲良いな」

「……（違う気がする）」

「直ぐ任務なのに悪いな、残ってもらって」

「構わない、其方には新人がいる」

「嗚呼、彰は任務に出るのも第二部隊に会うのも初めてだから紹介しとこうと思つてな」

「ふーん、その子が新人君か」

そう言つて僕より年上の男が見定めるかのように頭の天辺から足の爪先まで眺める

その右隣にいる女性は腕を組んで睨み付けるように顔を顰める左隣にいる男の子は未だオロオロしている

「新人さんだからって、甘えは一切聞き入れませんわ」

ビシッと効果音が出そうな勢いで人差し指を指された

「ちょ、蝶子さん・それじゃあ彼が可哀想ですよっ」

「何ですの！それじゃあ私が苛めているみたいですよー!」

「まーまー、蝶子ちゃんも猪間も落ち着きいて」

「どーどー」と二人を落ち着かせる男を後目に第二部隊隊長が僕へと自己紹介をしてくれた

「僕は第二部隊隊長、如月あかり 志埜しのだ」

「第一部隊所属の神宮寺 彰です」

「宜しく」

「此方こそ、宜しくお願ひします」

「彰も志埜も、凄い真面目だよなあ」

「聞こえますよ天笠隊長」

「もうちょっと肩の力抜いて気を楽にした方が良くと思うんだが」

「隊長は怠け過ぎです、もう少し真面目な部分を僕達に見せて下さい」

「………なー零、最近さあ第一部隊の俺に対する態度って何か冷たくないかあ？」

「気のせいだ（即答）」

ようやく落ち着いた三人がそれぞれ自己紹介を始める

「第二部隊所属の天宮 あまみや 蝶子 ちようこですわ」

「お、同じく第二部隊所属の蕪城 かぶらぎ 猪間 いのまです」

「第二部隊所属、閻魔 えんま 鹿目 かなめ。宜しく」

「第一部隊所属、神宮寺 彰です」

僕の挨拶を見届けた天笠隊長と如月隊長が声を掛ける

「早速で悪いんだが今から出発する」

「が、その前にコレを皆に配る」

そう言つて如月隊長が皆に手渡したのは黒い蝶と小さな赤い石がついたイヤリングだった

他の皆を見ると各々片方の耳に付けている

僕もそれにならない左耳にイヤリングを付けた

「このイヤリングは蝶子の魔力で作った通信機の様なモノだ」

「戦闘時に分断されても魔力を込めればこれで通信が出来る」

「あ、ちなみに蝶子ちゃんは第二部隊では主に後方支援でサポート

する側だから」

そう言う鹿目さんに蝶子さんが怒ったように詰め寄る

「その言い方ですと私がるで戦えないと思われますわ！」

「あはは、ごめんごめん」

「替わりがないから無くすなよ」と天笠隊長が言う

ちなみに魔力は誰もが持っている訳ではなく、そのため魔術が使えるのは人口の2〜3割くらいで

このヘルメスでは魔術が使えるのは紫翠様や裕美氷さん、第一〜第八部隊のみらしい

勿論、僕も魔術が使えたりする

「奴さんも魔術を使えるヤツは確実にいるだろうから」

「気を引き締めて行け」

目を閉じ黙って自信の愛器に触れる

始まるんだ

目を開けると視界の端で思案気な顔をした翔さんが見える

それも数秒のことで直ぐにいつもの表情へと戻る

天笠隊長と如月隊長の後に続いて皆歩き始めた

何が楽しいのか天笠隊長が笑って言った

「俺から言うことは何もないが、とりあえず『一人で突っ走るな』と『絶対死ぬな、生きる』コレ隊長命令な」

「相変わらず無茶言うね」そう言って誰かが笑った

第5話 第一部隊と第二部隊（後書き）

お読み頂き誠に有り難う御座います

最近、スランプ（？）中で・・・どう書こうかと悩みます

## 第6話 電腦次元〔サイバーディメションズ〕

人がいるのかも分からない館に足を踏み入れる

すると奥から執事らしきお爺さんが出て僕等を案内する

案内された先にはこの館にそぐわない機械が置かれた広い一室

何なんだろうと思っていると正面の大きなモニターが着いた

モニターには割と歳の若い白い軍服を着た男の人が写った

何処かに監視カメラでもあるのだろう、手を組んで此方を見て笑っていた

その顔に違和感が募った・・・何処かで見たような、そんな感覚

「ようこそヘルメスの諸君、僕が特殊特効暗殺部隊であるハデスの総司令官だ」

「また若いのが出てきたもんだ」そう言って天笠隊長が苦笑する  
それに対して男は目を細めて笑んだ

「早速だけど君達には其処の椅子に座ってもらおうよ」

その言葉と同時に執事が一人一人指定された椅子に座るように指示する

言われるまま座ると機械音と同時に頭に器具を取り付けられ体をべルト拘束された

「何だこれは!？」

「そう驚くモノじゃないよ」

「これは一体どういう事だ」

如月隊長が訝しむ様に問う

対して男は楽しそうに言葉を紡ぐ

「簡単なゲームだよ・・ただ単に生身でつても味気ないから」

その声と同時に視界が真つ暗になる

「バーチャルな感じで、ね」

意識が闇へと呑み込まれた

視界が晴れると一面真っ白な部屋にいた  
先ほど僕達がいた部屋ではない  
何も無い部屋・・・  
他の皆も部屋を見渡していた

「?・・・おい、蝶子達いねえぞ」

翔さんの言葉に周りを見渡せば確かに第二部隊の人達の姿が無かった  
どういふ事だろうと思っていると先ほどもらった蝶のイヤリングか  
ら如月隊長の声が聞こえてきた

「第一部隊聞こえるか?」

「志埜か」

「どうやら隔離されたようだ」

「うーん、してやられた・・・と言うか最初からこうするつもりだ  
ったのかもな」

「気をつける・・・多分、お前達（第一部隊）の方がメインだ」

「そのようだな」

そう言つて天笠隊長が見上げる先には先ほどの男が浮かび上がって  
いた

ホログラムだろうか身体が透けている

男は静かに笑つて肩を竦める

「第二部隊には悪いけど第一部隊のために用意したゲームだから部  
外者（第二部隊）は退場させてもらつたよ」

そう言つと同時に五つの通路が出現する

「じゃあ早速ゲームの説明ね、先ず君達がいるのは電腦次元、サイ

バーディメシヨンス」

「電脳次元？」

「まあ精神世界見たいなモノかな」と男は曖昧に答えた

「精神とバーチャルの身体が上手くリンクすれば動きも攻撃も良くなるよ」

「で丁度五人いる僕等に五つの通路、一人一人分かれて進めってこ  
と」

呆れたように珪さんが言う

「正解」と楽しそうに男は言った

不快だとも言う様に零さんが眉根を寄せる

「五つの通路の先に各々、対戦相手を用意しておいた・・・勿論、  
彼等も君達と同じバーチャルの身体だ」

「一対一の勝負か」

「そういうこと、まあその五つの内の二つは行き止まりで残りの三  
つは勝負に勝てば先へと進める」

「そこにも敵がいるのか」

「その次に進めるのは二つ残りの一つはそこで行き止まり、けどそ  
の残りの二つで僕へと辿り着く」

「分かりやすく言うとそんな感じかな」と男は語る

そこで男が今思い出したとも言つように続ける

「そうそう、勝負に負けた人も勝負に勝って行き止まりの人もゲ  
ムから除外されるから・・・頑張つてね」

そう言つて男が消える



きつと向こう側からこっちの動向は見えているのだろう  
隣にいる翔さんを見る

先ほどから様子がおかしい

そんな翔さんに気づいていないのか各々通路の前に行く  
通路の前にはご丁寧に番号が浮かび上がっていた

「何か動きづらいなあ」

「天笠隊長は不器用ですから」

「・・・それ関係あんのか？」

「彰は大丈夫か？」と天笠隊長に聞かれる

違和感が少しあるが特に動きにくいと言った感じは見受けられない  
ので「いいえ」と返し2と書かれた通路の前へ移動する

「俺は一番！」

「僕は二番に行きます」

「私は三番だ」

「俺は・・・四番」

「じゃあ僕が五番か」

第一通路に天笠隊長が

第二通路に僕が

第三通路に零さんが

第四通路に翔さんが

第五通路に珪さんが

各々、入ることになった

天笠隊長は僕達に

「とりあえず、何かあったら連絡しろ」

と告げ「じゃあな」と言っただけで通路の奥へと入って行った  
それに続くように皆も各々通路の奥へと消えて行った

**第6話 電腦次元【サイバーディメンションズ】（後書き）**

お読み頂き誠にありがとうございます  
次話からは各々の話（？）になります

第7話「神崎 翔 VS 斑鳩 水燕」の場合

瓦礫が散らばる荒々しい通路の先を抜けてソコへ飛び降りる

タンッ

「っと・・・あ?」

「ああ、やっと来た」

ゆっくりとしたテンポでそう言っつて男が笑う

ゆっくりと、ゆっくりと世界が変わる

「ようこそ僕（水）の世界へ」

いつの間にか男の手には蒼い大鎌が握られていた

「僕はA5（アトリビュート・ファイブ）の一人、斑鳩いかるが 水燕すいえん」

翔は訝しげに斑鳩を見る

正確には斑鳩の背後を、確かめるように・・・

そして、笑った

右耳にある蝶のイヤリングへと触れる

「四番」

「?」

それを斑鳩が不思議そうに見る  
そんな、斑鳩を無視して空いてる片手に意識を集中させる

「・・・あつたぜ、通路」

「了解」と誰かの声が聞こえた

第七話 【 神崎 翔 VS 斑鳩 水燕 の場合 】

「なんだ、通信機何て持ってたんだ」

静かに斑鳩が吹く

「あ？持ってちゃ悪いのかよ」

「別に……」

「……………」

「……………」

会話が続かねえ……

一つ溜息を着いて先ほどの言葉を思い出す

アトリビュートは属性、ファイブ……は5だよな

つまり五属性……の一人つつう事はコイツはフィールド的に考え  
て水アクアだな

見渡す限りが様々な色をした蒼い空間と相手の腕に施された水術の  
入れ墨

武器は大鎌、主となるものは水アクアだが……他の場合も想定しておく  
しかねえか

上着の右ポケットの中へと手を忍ばせる

その中にある小さいメモリカードとUSBを握りしめ取り出す  
斑鳩をじつと見つめ対峙すると斑鳩が溜息を吐いた

「来ないなら」

空間にいくつもの水の玉が浮かび上がり

「こつちから行くよ」

素早く翔の背後まで移動すると大鎌を振り下ろした

「チツ」

それを跳躍して交わす

斑鳩が一瞬笑った気がした

パチンッ

水玉が翔の右肩に当たり弾ける音  
そこで翔も気づく

ドンッ

「!?、ゲッ・・・」

割れると同時に爆発が起こり、翔の右肩に痛みが走る  
見れば右肩に火傷の後があった

右肩を押さえる手からは嫌な汗が出ていた  
思わず眉を顰める

おいおい

「まじかよ」

「痛みもリンクするのかわよ」そう吹いて相手を睨み付ける

斑鳩は翔の言いたいことを察すると薄く笑んだ

「何を驚く必要がある?いくら精神世界と言っても痛みだってちゃんと感じるんだよ」

「そうでなくちゃ面白くないだろ?」そう言って笑う  
その笑い方が翔の癢に障る

「つて事はテメエも同じ、なんだろつ諸々の悪しき汚れを射貫け煌矢！！」

左手で術を展開させて無数の光の矢を斑鳩へ目掛けて放つ

「水泡壁ッ！」

水の球体が斑鳩を包み無数の光の矢を防ぐ

「チッ」

「水の加護を受けし水の化身、水獣よ・・・我が手足となり我を助けん水獣招来ッ出でよ水龍、水虎！！」

人の何百倍もある大きさの水龍と水虎が翔の前へと現れる

貴様の勝ち目は有るまいと斑鳩が笑う

その笑みに翔は何かを感じる

何処かで見たことある種類の笑いだ

何時も嫌みつたらしく笑む忘れることのない笑み

嗚呼、コイツは・・・

「アイツ（珪）似か」

「？」

「そう思うと無性にムカついてきやがった」

腹立つ事この上ない、と言った感じに目の前にいる斑鳩を一瞥して笑う

「悪いがとつとと終わらせるぜ」



その言葉に斑鳩が訝しむ

「この僕の空間で、そう易々と終わらせはしない」

「無理だ」

その絶対的な侮辱とも取れる言葉に斑鳩が動く

「水獣乱舞」

翔へと近づくと術で召喚した水龍と水虎の攻撃と共に一気に大鎌を振り下ろそうとした

そこで気づく、目の前の男が笑っていることに

それと同時に自分の体や術が薄くなつて消えていくのに気づいた斑鳩は動揺を隠せずに翔の方を見つめる

「これは、どういう事だ」

「あ？オレはただちよつとこの空間を弄っただけだぜ」

そう言つて先ほどから持っていたメモリーカードとUSBを斑鳩の目の前へと見せつける

「空間を弄つた、だと？」

「テメエが攻撃とか話してる間に気づかれねえ程度に術かけて、この空間弄つたんだよ」

「テメエをこつから離脱させるためにな」そう言つて翔は悪戯が成功した子供の様に笑う

しかし、斑鳩には納得がいかなかった

「馬鹿な、この空間並大抵の者でもそう易々と弄れるモノではない」  
「しかも、この短時間でだ」と言う斑鳩の言葉に溜息を付く  
若干の苛立ちを込めて話す

「つたくよお、オレを誰だと思ってるんだ」

「？」

「道化の情報屋クラウンハッカー、聞いたことぐらいあるだろ？」

「貴様が道化の情報屋、だと」

斑鳩は信じられないといった風に翔を見る  
対する翔は癩に障ったのか米神が引きつる

「道化の情報屋と言えば、様々な情報を保有する最強の情報屋……  
しかもハッキングは国家レベルをも超える程の腕だと言う噂も、そ  
れが貴様だと言うのか」

「まあ、つまりオレにとっちゃこのバーチャルな世界そのものがオ  
レの武器なんだよ」

「ゲツ」

「まあ、これも勝負の内だから……悪いけどオレの勝ちだぜ」

消えつつある斑鳩が悔しそうに翔を睨み付けた

「まあ、テメエを離脱させる為には半径5m以内に入れなきゃなん  
ねーってのが悩みだったが」

「案外単純に挑発にノってくれて助かったぜ、そこはアイツ（珪）  
とは違えな」そう言って翔は斑鳩が消えた空間を見て笑った

「んじゃ、先行くか」

そう吹いて翔は右耳のイヤリングへ触れる

「勝ったぜ」

一言、そう吹くと通路の奥へと消えて行った

第7話「神崎 翔 VS 斑鳩 水燕」の場合（後書き）

お読み頂き有り難う御座います

何かドタバタと書いてしまいました・・・が、直しは多分きつとあります（冷汗）

第8話 「天笠 宗平 VS 遠野 雷土」の場合

空けたスペースの一角に男が一人立っていた  
その後方には壁

「なるほど、ハズレって訳か・・残念」

蝶のイヤリングに触れ「一番ハズレ」、そう言って前にいる男を観  
察する

歳は自分よりも年上で40代後半ってところか・・

「どうもなあ」

「・・・・・」

相手が何事かと顔を顰めた

対する宗平は後ろ手で頭を書きながら溜息を着く

「年上は苦手なんだよなあ」

「フンッ、私の知ったことか」

「うわあ・・お堅い感じが、また一段と・・無理だわ、俺」

「どうしよう」と言いつつ大剣を握る手はしっかりと離さないまま  
相手と対峙する

そんな宗平を無視して男は話し始めた

「私はA5の一人であり他4名のA5の取締長でもある、遠野 雷  
土だ」

「・・・そりゃあご丁寧にどうも、俺は第一部隊隊長の天笠 宗平」

「そうか、貴殿も似たようなものか・・・だが貴殿には悪いがこの勝負、勝たせてもらおうぞ」

「保護者（隊長）同士・・・お互い、負けられないって事か」

言い終わるが早いか、お互い武器を構えて地面を蹴った

第八話 〔天笠 宗平 VS 遠野 雷土〕の場合

キンッ

キンッキンッ

高速で混じり合う刃に甲高い音と火花が散る

剣を交えながら宗平は先ほどの言葉を思い出していた

・・・A5（アトリビュート・ファイヴ）って、何だ？（アホ

と言っか

「相性悪くないか」

宗平の大剣に対して雷土と言う男は通常のモノより大きめの薙刀を使っている

近距離の宗平に対し雷土は近・中距離

しかも、彼の主たる術は雷

「狂気に轟け雷鳴!!」

ドガッ

「おっと…」

繰り出す術や剣技に避けながら反撃もせず逃げ回る宗平を雷土は黙って見つめる

が、突然攻撃の手を止めると溜め息を付いた

「いい加減諦めたらどうだ？」

「？」

「貴殿は見たところ術や頭を使うと言うよりも体力派の体育会系で不器用」

「……………」

…俺って、そんな分かりやすいか？

「その反応では凶星の様だ、それと貴殿は術が使いぬと見た」  
「…へえ」

「フンツ、その証拠に先ほどから避けるばかりで防御術の一つも使  
つてはいないだろう」

心底呆れたと言つ様に雷土は宗平を見る

「貴殿と私とでは私の方が上だ」  
「なるほどね」

宗平は少し困つた様に頭をかいた

「うーん、強ち間違つちやいないけどなあ…」  
「強ち、だと？」

「言い訳つて分けじゃないが、別に逃げ回つてた分けじゃないぞ」

宗平は片足を軽く上げ踏み降ろす

と、同時に床の至る所から小さい光が現れる  
それに気付いた雷土が眉根を寄せる

宗平は左手にある小さな漆黒の粒を見せた

「…それは、魔力補助石？」  
「…」名答

悪戯が成功した子どもの様に笑う

「コレを蒔くために逃げ回っていたのか」

「まあ相手の実力も確かめたてたんだがな」

「何だと…」

「ちゃんと凌げられるかどうかな」



そう言つて宗平は右腕に着いているバンクルを外すと同時に、宗平の周囲の空気が変わる

その桁違いの魔力に雷土は気付くと瞠目する

「俺は別に魔術が使えない分けじゃない」

その桁違いの魔力に雷土は目を見開く

「使わないだけだ」

ドオオオオン

パキッ

一瞬だった

術の衝撃で飛び散った瓦礫の上を歩くと倒れている雷土を見る

「危っねえ（汗）」

宗平は草臥れた様に座り込むとホッと息を吐く

「あーやっぱり制御が出来んから加減が分からん」

魔力補助石で補助しても制御装具を一つ外してコレとは…

ほぼ全壊状態の空間を見る

「やっぱし俺、不器用なのか？」



第8話 「天笠 宗平 VS 遠野 雷土」の場合(後書き)

毎度毎度お目汚しすみません；  
まだまだ続きます

第9話「紅媛寺 零 VS 狩谷 金留」の場合

通路奥の広い空間

隠す気もない殺気が自分の方へと向けられる

ガガガガガガガガガッ

素早く飛び退けば、無数の弾丸の雨がその場に降り注いだ

「容赦のない事だな」

「ブハッ、避けられちっタ」

陽気な声で男は笑う

その気味の悪い笑いに零は僅かに眉を顰めた

「ケハハアッ：はあやあくう、殺ろおぜエ」

「バカが相手か・・・」

「バカじゃあない、ぴよんッ」

ガッ

素早く振り上げられたダガーを避け後方へ飛び間合いをとる  
避けられたダガーは凄い音をたてて壁にめり込んだ

「あ？」

「確かに只のバカではないようだな」

「たあだあのお元ヤク中うでえくす、ギャハハハアッ」

「全くもって不愉快だ・・・名前くらい言えるだろう？」

「んあ？ええとお何だっけ？？A5のお狩谷 金留でえすッ」

ダダダダダダッ

無数に飛んでくる銃弾の軌道を読みながら素早く間合いを計り移動する

「全く落ち着きがないな」

A5・・・五属性

・・・物質的なモノから推測して金か<sup>メタル</sup>

腰にある刀の柄にそつと手を掛けて目の前の金留と言う男を見る  
隠す気もない金の銃に金のナイフ、おまけに金の銃弾  
馬鹿なのか・・・それともワザとなのか・・・  
只、確かに言えることは

「金の使い過ぎ」

「だあってえ、オレの金だしい？」

「一つ」

「んあ？」

腰にある刀を鞘から抜き取り零は笑う

「仕置きが必要だな」

第九話【紅媛寺 零 VS 狩谷 金留】の場合

ガガガガガッ

キン、キンキンッ

繰り出される銃弾を零は器用に刀で弾き返す  
銃弾は全て零の急所を狙っており、対して零も時折銃弾を弾き返し  
ながら急所への剣撃を繰り出している  
しかし、相手も素早い動きで交わして打つ  
有り得ない様な至近距離での攻防

キンッ

ザッ

どちらともなくお互いに距離をとる

「ケハッ やるじゃねえのお」

楽しそうに笑う金留に対して零は無表情から不機嫌そうな顔になる

「よく言う……」

「んあ？」

「殺る気ないだろう？」

「……………ケハツ」

一瞬

ボサボサの髪の間から見えた表情

「見る限り、お前は強い」

「ブハツ、ホメラレちった」

「だが」

「？」

「精神が軟弱だ」

ドンドンッ

弾丸を刀で弾くとニヤリと笑んだ

対する金留からは鋭い殺気が向けられる

しかし、それさえも気にしないと云うかの様に刀を鞘へと納めた

徐に瓦礫の上に腰かけると一瞬、相手から動揺のような気配を感じた

「少し、話をしようか」

「……………」

「そんな身構えなくてもいい」

暫くの沈黙の後、金留は銃を下ろした

それを見た零は目を微かに細める

「私は、お前がそちら側の人間という事に、些かに引っ掛かりを感じている」

「んあ？」

「お前からは…臭いがしないんだ」

「……………」

何が、とはお互い言わなかった

先ほどから感じていたが、彼は……馬鹿ではない

むしろ……

「わざわざ話を聞いてくれる辺り聞き分けが良いようだ」

となれば、早く済ませるか

「……………行くぞ」

零が立ち上がり刀を構えると金留も静かに銃を構えた

ザッ

ガガガガガガガッ

銃弾の雨の中を交わしながら金留の間合いへと入る  
スカイブルーの瞳と金の瞳が一瞬、交差する



「百花繚乱、紅乱舞ッ！！」

ザッ

「ガッ！？」

無数の斬撃が金留を捕らえる  
花びらの如く艶やかに軽やかに鮮血が宙を舞う

ドサッ

「…………ツ」

「悪いな、先を急いでるんだ」

静かに刀を鞘に収め、後ろ背に金留へと語りかける

「……金留」

「んあ？」

「ハデスをやめて、ヘルメスへ来い」

「…………」

「お前はこっち側の方が合っている」

「それと、その言葉使いもやめろ」そう言って零は静かに通路の奥へと進んでいった

そう、むしろ私の方が…………

「三番、このまま進行する」

## 第10話【神宮寺 彰 VS 凜 木黎】の場合

通路の奥に見える広い空間は、綺麗な模様の入った柱と丸い模様の入った床、綺麗な蓮の花が咲いた池が広がっていた。一見してそれが、中国っぽいのがわかった。そして、丸い円の床の中央にそれはいた

「オマエが、ワタシの敵」

「・・・ヘルメス、第一部隊員の神宮寺 彰です」

「A5の凜<sup>りん</sup> 木黎<sup>もくれい</sup>」

碧色の髪を結び、動きやすそうな蒼いチャイナ服を着た少女。見る限り僕とそう年齢は変わらないだろう・・・

A5（5属性）と言うことは彼女は何にあてはまるのだろうか。武器は持っていないし、見るからに体術系だ。

けれどA5と言うからにはどこかの属性には当てはまっているはず。そこまで考えて木黎の後ろ、通路を見る。耳にあるイヤリングへ魔力を込める。

「二番、通路ありました」

そうして、意識を目の前の相手へと戻す。

お互いに、ゆっくりと一定の距離で間合いを取る。両手に握る銀色の銃が、鈍く光る。

その瞬間、木黎が素早く彰へと向かい走る。

ザッ

「・・・！？（速い）」

ガッ

軽やかに繰り出された蹴りを両手に握られた銃で受け止める  
思っていたよりも、重い蹴りに腕が少し痺れた

そのままの状態で、もう一方の足で彰の腹部へと木黎は蹴りをいれる  
が、両手の銃に力を込めて体ごと遠くへ押しやった

木黎は空中で立て直して着地すると、すかさず彰へと向かう

ドンッ

ドンドンドンッ

急所への攻撃を木黎は難なく交わして、彰の懐へ入る

「木棍術・突の巻！」

ドドドドドッ

碧色の魔法陣から無数の棍棒が、彰の腹部へと叩き込まれる  
そのまま彰は後方へと、吹っ飛んだ

ヒュッ

「ッ！？」

「これで終わり・・・」

眼にも止まらぬ早さで彰の目の前に移動すると拳を構えて、放つ

「竜虎戦流拳！！」

第十話【神宮寺 彰 VS 凜 木黎】の場合

ドオオオオオオオオオ

受け身もとれず彰の身体が壁へとぶつかり、落ちる

「終わり・・・」

「なるほど」

「ッ！？」

「木プリントですか・・・」

吹き飛ばされた方ではなく後方からの声に、無表情であった木黎の眼が見開かれる

信じられないと言つような面持ちで振り返り彰を見る  
どんなに目を凝らしても、彰の身体のどこにも傷はなかった  
しかし、と木黎は足下を見る  
足下には確かに無数の血痕が落ちていた

「どうして……」

「その血は……」

「？」

「あなたのですよ？」

「ッ!？」

すぐに自分自身の身体を確かめると右肩と左腕に銃で撃たれた様な  
後と血が滴り落ちていた

「何で「痛みが、しなかつたか」……」

「簡単ですよ？私があなたに撃つたのは、痛覚を感じさせる神経を  
麻痺させる弾丸なんですから」

「……」

「ちなみに、あなたの攻撃はちゃんと当たっていましたよ？僕の作  
った幻影に」

「なっ!？」

両手の銃をホルダーへと仕舞い一つの弾丸を取り出す

「幻影・幻想・幻聴の効果がある弾丸です……まあ、これは僕独  
自で作ったものなので売ってはいませんが」

ピンッ

片手で弾丸を弄び弾く  
木黎の表情が悔しそうな表情へと変わる

「嗚呼、それと僕は君に全部でいくつの弾丸を撃ち込んだか分かり  
ますか？」

「!?!?!?!?! 2発」

「不正解、答えは4発」

「なに?!?!?!?!」

問いかける木黎の身体がゆっくりと傾き崩れ落ちる  
何が起きたのかも分からず、目を見開いて彰を見上げた  
対する彰は静かに木黎を見た

「右肩と左腕に2発ずつ、計4発・・・その内2発は先ほど説明し  
た弾丸が」  
「.....」

「そして、残りの2発のうち1発は麻醉弾」

「もう一つは.....」  
そう言って木黎の目前にしゃがみ込む  
囁く様な、語りかける様な声で木黎へと問いかける

「この先で待っている人達について教えて頂けますか？」

「ッ!?!?!?!?! 詳しい事は知らない..... S3 (サイレント・トレ)  
である彼等は普段は全く表に出てこない」

「S3.....ですか」

顎に手を当てて考える

S3.....サイレントは音無、無言でトレは多分イタリア語で3の  
ことだろう

「もしかして.....音無の3人衆」

「静寂にして無音の暗殺者、その存在すら不確かな者達」

「・・・最後に、総司令官について」

「総司令官についても詳しくは知らない、戦えるのかも分からない・  
・・・いつも命令出すだけ」

「名前は？」

かんざき いおり  
「神崎 伊織」

もう、得られる情報はない・・・か

立ち上がり、無言で通路へと向かう

「二番、問題ないです」

最後の1発の弾丸は、試作にある自白用の弾丸

ふ、と何を思ったのか彰の足が止まりホルダーから銃を取り出し、  
木黎へと振り返る

「嗚呼・・・忘れてました」

その表情に、木黎はぞつとした

何の興味のない様な紅い瞳が、まるで其処に何もなにかの様な眼で  
鈍い光をおびて見下ろしている

彼の髪と同じ綺麗な銀色の銃口が、静かに向けられた

「もう、消えていいですよ」





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6858/>

---

銀色のブラッド

2011年11月7日11時07分発行